
X'mas fire

もち武者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

X・mas fire

【Nコード】

N1105R

【作者名】

もち武者

【あらすじ】

今日はクリスマス。

僕が一番嫌いな日。

クリスマスなんて廃ればいいのに。

そんなクリスマスの真夜中に。

「クリスマスだとかって浮かれてる連中も嫌いだけど、アンタみたいなヒネた餓鬼も嫌いだね。」

僕はサンタクロースにあった。

チヨツパーに股がつた、二丁拳銃のサンタクロースに。

・最低な日

僕はこの日が大嫌いだ。

街はどこもかしこもキラキラライトアップされ、間の抜けた陽気な歌があちこちから聞こえてくる。

歩いてる連中も誰も彼も浮かれている。

今日はクリスマス。

多分ほとんどの人間が幸せを謳歌している日。

でも。

サンタはいないし、

帰っても家には誰もいないし、

勿論パーティーもツリーもない。

ほとんどいつも通り。

いつもと違うものといえば、テーブルの上に置いてある夕食代が千円多かったのと、冷蔵庫に入っていた小さなケーキぐらい。

「ふう・・・。」

ため息、もう何回目だろう。

塾から家までの帰り道では、この目抜通りを必ず通る。

普段なら何とも思わない街並みが、今日は何もかもがしゃくにさわる。

手にぶら下げたコンビニ弁当すら、重く感じる。

無意識の内に早足になっていている自分に怒りすら覚え、立ち止まって

空を見上げた。

雪がちらつくホワイト・クリスマス。

見知らぬ髭のおっさんの誕生日をなぜ世界中で祝うんだろう。

「クリスマスなんて廃ればいいのに。」

道行く人に聞こえないよう小さく呟いた。

・聖夜の使者は轟音と共に

その日の真夜中。

僕は積もったばかりの新雪を踏みながら歩いていた。

特に目的も意味もない。

帰ってから風呂に入り、夕食のコンビニ弁当とプチケーキを食べ、勉強を済ませたあと。なんとなく空を眺めてぼんやりしていた。

「早く寝ないとサンタさんがこないぞ!？」

父さんが生きてた頃のクリスマスにそう言われたのを思い出した。

あの頃はまだ母さんも働きに出てなくて、あわてて帰って来た父さんと三人でクリスマスを過ごしていた。

サンタなんかいない。サンタなんか。

今日、夜の町を歩き回ってサンタなんかいないことを証明してやる。

あの時なんであんなに熱くなったのかわからない。

今はもう頭が体と共にすっかり冷えてしまっ

「もう帰ろう。」

と車通りの全くない道路を横断しようとした時。

ヴォンヴォンヴォン

耳が凍ってしまったんじゃないかと思うほどの静寂を荒々しく噛み

砕くような轟音に、

ヴォンヴォンヴォン

思わず足を止めて立ち尽くしてしまった。

ヴォンヴォンヴォン

気づいたその時にはライトに照らされ視界は真っ白だった。危な

ギキイイイイ！

腰が、抜け

「オイコラくそガキ！死にてえのか！！」

ズカズカと足下にあるものの全てを踏み砕く勢いで詰めよって来たのは。

「ん？HEY！気失ってんのか？HEY！」

サンタ、だった。
多分。

・ぶち壊しメルヘン

「ほれ、コーヒー。飲めるか？」

なぜか僕は今サンタ風な女の人と公園のベンチに座っている。

「・・・頂きます。」

受け取ったコーヒーの缶が冷えた手には熱くて、取り落としそうになる。

「しっかしよお、辛気癖え面だなあオイ！」

ベンチに飛び乗るように腰掛けながら空に向かって叫ぶように言う。

・・・ほっというてほしい。

この女の人は何んと言うか、サンタ色だった。

赤のインナーに襟元と袖口だけ白い赤の革ジャン。

真っ赤なホットパンツはロールアップの部分だけ白い。

紐と靴底だけ白い赤色の編み上げブーツ。

その頭に、不釣り合いの見慣れたサンタ帽。

「なんつーかよ、ガキなんてのはクリスマスなんつったらアホみたいにはしゃぐもんだろ、普通。」

「・・・嫌いなんです、僕。そういうの。」

チラッと横目で僕を見る。

早く帰りたい。

「わかるぜ、どいつもこいつも脳ミソどっかに置いてきたみたいな顔してよ。」

ケーキだチキンだシャンパンだってよ！」

人の苦勞も知らねえで、と舌打ちするサンタチックな女の人。

大人の人が僕と同じ気持ちなのが少しだけ嬉しかった。

「知らない人の誕生日なんて祝う必要無いですし。」

ギシッとベンチを軋ませて体ごとこつちをむくサンタ的な人。

「ま。」

意地の悪そうな笑顔で。

「クリスマスだって浮かれてる連中も嫌いだけど、アンタみたいなヒネた餓鬼も嫌いだね。」

「自分だって浮かれてる連中の一人じゃないですか。」

少しカッとなつて反論すると、女の方はムツとした表情で、

「コレは仕事着だっつーの！仕事だよ、仕事。」

「仕事？ケーキ屋さんの・・・」「サンタだよサンタ。見りゃわかるんだろ！」

「・・・バカにしないでください。」

子供だと思つて。

「まったく、とことんヒネたガキだなおめえは。サンタクロースだよ、本物の。」

多分、十人、いや百人に聞いても百人全員が、想像するサンタクロースと違い過ぎると答えると思う。

まず、

「トナカイは？」

「そこにあんだろ、赤鼻のトナカイ（チョッパー）が、よ。」

赤いバイクを指差して当たり前な事みたいに言う。
それじゃあ、

「空飛ぶソリは？」

「んなモン無くてもそいつでどこだっていけらあ。」

フフンツと得意気に笑う。
なら、

「サンタクロースはおじさん」「男女雇用機会均等法つつーのを知らねえのか？女がサンタで何が悪い。」

こよきかいきんとー何？

「じゃあプレゼン・・・ト」

後ろの方に誰かいる気がして振り向く。

なんでだろう、心臓がドキドキして苦しい。

「プレゼント、ねえ。強いて言うなら。」

声に反応して向き直ると、自称サンタは両脇からスルリと何かを取り出す。

それは公園の照明に照されギリリと光る

二丁の、拳銃。

え？

「コレ、かな。」

ドン
ドン

2つの爆裂音が、冷たい空気を乱暴に揺らした。

・ヘビー・クリスマス

氷のように冷たい目。

二丁の拳銃からは二筋の硝煙。

後ろで束ねた金髪が、キラキラと輝く。

「いいかベイビー。良い子だから動くなよ。あたしやモーティマー大佐みたたくうまくやれる自信はねえ。」

何なんだ今日は。震えが止まらない。

少し焦げた臭いがする。僕のすぐそばを、何かが高い音を残して通りすぎた衝撃がビリビリと肌を揺らす。

でも。そんな事よりも。

あれは、なんだ？

「ちつ、夜の公園で男女が二人だけ？全く、野暮な連中だけ。」

ポケットから取り出したサングラスをかけながら、まるで狼みたいな顔で冗談を言うサンタ。

「もっかい言うぞ、動くなよ？そこで膝かかえて大人しくしてろ。」

やっぱりアレは善くないものなんだ。
見ていると何だか不安になる。

「さあて、お仕事の時間だぜ。サンタクロースのお出まし・だ！」
ドドン

二発の銃声。ゴミ箱近くと滑り台手前のソレが、弾丸に貫かれブスブスと気味の悪い音をたてて消えていく。

黒い影。

人生ゲームの駒から手が生えたような黒い何か。

足元はまるで幽霊みたいにおぼろ気で、顔？には横まで裂けた口だけが、醜い笑顔を作っている。口からのぞく白い歯がやけに目につく。

全身が黒だから目立つのだ。

ソレがだいたい十人（匹？）ほど、僕たちを囲むようにユラユラとたたずんでいる。

「今年も盛大に食い散らかすぜ！？メリークリスマス糞ども！！」

サンタが黒いモノ目掛けて突撃する。

黒いモノはサンタを捕まえようと一斉に手を伸ばす、が。

ドン ドンドン

体をひねり、跳び跳ね、頭を振り、黒いモノの攻撃をかわしざまに銃弾を浴びせる。

あっという間に三つの黒が夜に溶けた。

「オラオラオラアアア！！」

ドンドンドンドンドンドンドン

まるで踊るように旋回しながら黒いモノの手をかわし弾丸を当てていく。

黒いモノがどんどん消えて。

「デメエでラストだ！」
ドン

最後に赤いケモノが残った。

・サンタの仕事

「よう、ガキンちよ。余計な穴は増えてねえか？」

声が出ず、カクカクとうなずく。

「悪いいな、巻き込みまって。立てるか？」

頭をかきながら申し訳なさそうに手を差し出してくれた。

「あアレ、何？」

上擦った声が出て、少し恥ずかしかったけど。

でも聞かずにはいられない。

あの黒いモノの正体。

「ありあな、【嘘】だ。」

嘘？

「この時期どいつもこいつもつく【嘘】だよ。その【嘘】の成れの果てってどこか。」

誰もがつく嘘？

この時期に？

・・・あ。

「サンタクロースの事！？いないのにいるって。」

「ぶあくか！サンタは居るだろうが目の前に！」

ちよつとだけ怒ったような顔になった。

「良い子にプレゼントうんぬんの下りだよ、【嘘】は。」

サンタクロースがクリスマスの夜に枕元にプレゼントを運んでくる。多分知らない人はいないだろう【嘘】が、あんな化け物に？

「悪い嘘じゃなくてもあんな風に・・・？」

誰かに迷惑をかけるような嘘ならわかる。

けど、サンタクロースの話は違う。

それなら童話や昔話もあの黒い【嘘】になるはず。

「誰かが悪用すればどんな優しい作り話も毒になんのさ。」

悪用？サンタクロース詐欺何て聞いたことない。

「言われたことねえか？『良い子にしないでサンタさん来ないわよ』とかなんとかよ。」

確かに、この時期の言うことを聞かない子供に対する親たちの最高の殺し文句。

「サンタをだしに『良い子』を強要する。

考えてみりゃひでえ話だ。」

「でも、あんなのが生まれるほど悪い嘘だとは思えないよ。」

他愛のない嘘。

世の中には人が死んでしまうような嘘がある。それにくらべれば・・・。

「質より量の問題だよ、ちいせえガキなら大概騙される。しかもそこいら中だ。聖なる夜が聞いて飽きれらあ。」

1つ1つは小さな嘘。

でも、考えてみればこの日が来るまでに町中、いや世界で使われる嘘。

たいがい対象は小さな子供。

そしてその内のほとんどが信じてしまっ、嘘。

「昔はもつと酷かったらしいぜ？」

サンタクロースがいねえ、【嘘】をかたす奴もいねえ。

だからある日、あいつらと戦ってきた誰かがサンタクロースを名乗った。

赤い服着てトナカイ引いて、な。」

サンタクロースの誕生秘話。

それを話すサンタは少し誇らしげだ。

「嘘がほんの少し本当になって、【嘘】もほんの少しちいさくなっ
て。

その誰かにも仲間が増えて。

それが今のあたしら、『サンタクロース』ってわけだ。」

真っ赤なバイクを撫でながら、優しい顔で語る。

その顔だけは、僕が知るサンタクロースを思わせるものだった。

・【嘘】

「さつてと。」

サンタが立ち上がり、腰を伸ばす。

「乗んな。家まで送ってやんよ。」

投げてよこされたヘルメットが、両手をすり抜け胸にあたった。ちよつと苦しくて咳き込む僕を見てサンタが笑う。少し悔しいのと恥ずかしいのとで顔があつい。

「【嘘】になんでピストルが効くの？」

特殊な弾とか使ってるんですか？」

あわてて質問したために敬語と普通のしゃべり方が混じってしまった。

「なんだ知らねえのか、コルトは最強なんだぜ？」

その気になりや聖書の中の神さんにだって新しい穴プレゼントしてやれらあ。」

明後日の方向に向けて自慢気に銃を構えるサンタ。

・・・出来れば一生その気にならないで欲しい。

「殴つても倒せやし、虎狩りみてえなもんさ。

あたしも詳しくはわかんねえんだ。」

詳しくわからないものをよく素手で殴れるものだ。

「ま、数がいやがるからこいつで蹴散らすほうが早ええ。」

といいながら、バイクの後ろに積んであった大きな箱から長い銃を取り出した。

「AKだ。こいつはマジ最強だぜ!!」

まるで玩具を目の前にした幼児のようにキラキラした目で銃を撫でる。

「さっきはコルトが最強って言うてたのに。」

「ッセーな!コルトの次に最強なんだよ!」

サンタの顔が真っ赤になって、いよいよ赤くない部分を探すのが大変になった。

「い、いいから乗れよ!早くしねえとあいつら、また集まってくるぞ?」

ヒラリとバイクにまたがるサンタ。

まだ耳が赤い。

手を借りてバイクにまたがる。

サンタが鍵をひねると、

ヴウウン

赤鼻のトナカイが低いうなり声をあげた。

「しっかり掴まってろよ、コイツはあたし以上にファンキーだから、よ!」

ヴウン ヴォンヴォン

顔を叩く風にバイクから引きずり下ろされそうになり、あわてて腰にしがみつく。

スピードが上がっていくうちに、僕は。

心のどこかに火が入るのを感じた。

・黒い森の赤い嵐

ゴウゴウと耳を叩く風に混じって、歌声が聞こえる。

それは英語だろう、意味はわからないけど、クリスマスには似つかわしくない激しい歌。

でも、陽気なクリスマス・ソングより僕はサンタの歌の方が好きだ。父さんも激しい洋楽が好きだった、と思う。

日曜の日課にしていた洗車の度に野太い声で歌っていた。まだ小学校低学年だった僕はよく手伝いと言うあの邪魔をしていた。

「h i g h w a y ・ s t a r . . . 。」

父さんが歌っていた歌。父さんが好きだった歌。

「お！知ってんのか！？ガキの癖にいい趣味してんなあ！」

おんなじ歌だったのか。僕の記憶の中の父さんは、ひどい音痴らしい。

「うおおー！」

キキイー

急に減速した反動でサンタの背中に押し付けられた。バイクが横滑りに１メートルほど進んで止まる。は、鼻が・・・。

「・・・シット！」

ようやく顔を上げた僕の目の前に。

「オーケーガキンちょ、さっきとおなじだ、大人しくしてろ。
そしたらアリーナでミラ・ジヨボビッチばりのgun・fight
が見られんぜ!？」

【嘘】が。

【嘘】の群れがいた。

心が凍えて涙が出そうになる。

「大丈夫だ、あたしが行ってやつつける。

ビビる暇があんなら何時におうちに帰れるかを心配してる。

あんな連中一曲足らずで躍り潰す。

だから、な？安心して手を離せ。」

知らず知らずの内にサンタの服を力一杯握りしめていた。

「ごめん！なさい……。」

サンタが優しく笑う。

でもそれは一瞬で狼の顔になり【嘘】を睨む。

僕が手を離すと。

「dust to dust（塵は塵に）だピス野郎ども！」

サンタ自体が弾丸のように【嘘】の群れに飛び込んでいく。

サンタはAKを背負ったまま二丁拳銃を構える。

サンタを囲む【嘘】の腕がまるで倒れる樹木のように降り注ぐ。

それを二丁のコルトを振り回し、叩き落としていく。

そして距離をつめた瞬間、銃声が音に聞こえないほどの速度で【嘘】に弾丸を浴びせかけた。

黒の塊が音もなく崩れ、サンタの姿が現れた。と思うと次の瞬間には別の場所で火花がちった。

まるで嵐のよう。

僕はサンタに完全に目を奪われていた。

だから。

僕はすぐ後ろに現れた【嘘】に。

全く気が付かなかった。

・burst shot

「うわあああ！」

冷たい空気を揺らす絶叫。

誰の声？

わかりきってる、あのガキンちょだ。

【嘘】に追われて逃げ出すアイツが視界の端に移った。

「HEY！動くな！今いく！」

待てってば、HEY！」

曲がり角に消えた

ちつヤベエ！

「あいつらはな、土足で人様の中に入って来て内側から人を喰うんだ。」

そう先輩サントは言ってた。

シンさん・・・。

アンタならどうする？

「どうもこうもねえか。あの人はこんなときに迷いはしねえ！」

怖えかガキンちょ。

怖えよな。

「んがあああああ！」

待つてろ、とびきりイカしたサントが今いくぜ！

「退けえええええ！」

ガキンちよが消えた方向に銃口を向け引き金を引く、引く、引く。
gun fireが、銃声が、あたし自身の咆哮が、目を、耳を、
鼻を焼く。

薬莢の数だけ連中を消し飛ばす、が。

「チイイイ！らちが明かねえ！」

次から次へと湧いて出やがる！
らちが明かねえなら、

「こつからはロックの時間だ！

熱つい鉛でホットに踊れえ！」

AKでらちを“開け”てやる！

ドドドドド

まるで世界が崩れたかと錯覚するような銃声。

放たれた鉛玉が眼前の【嘘】を手当たり次第に噛みつき、食い散らかす。

やっと開けた道に遮二無二体を押し込みながら四方八方がまわらず火線を走らせる。

ほら見るガキンちよ、最強だろ？AKは。
だから、

「ガキンちよ！聞こえつか！？HEY！」
だからもう少しだけ辛抱してくれ。

あたしは、あたしは！

もう自分みたいな奴が泣かなくて済むように、あの日あたしを救ってくれた、シンさんみたいな人間になって。

シンさんみたいなアホみたいに優しくてバカみたいに強え人が、また目の前で死なないように！

「うああああ！」

強えサンタに！ なったんだ！

「助け、あ、あ、うわあ！」

見つけた！

曲がり角のすぐ先で【嘘】に囲まれたガキンちょ。

数は1、2、大したことねえが、近すぎてAKが使えねえ！

「うらあああ！」

AKの銃身を握ってバットよろしく振り上げる。

すっかり熱くなったバレルが手袋を焦がす。

構うもんかよ！

ガスっ！

とりあえず手近な一匹を全力で殴り倒す。

こっちに気付いた【嘘】の顔面にブーツの底をプレゼントして、踏み台にして飛び上がる。

そして、ガキンちょと【嘘】の間に割り込んだ。

「確かに返してもらったぜ!？」

代金は例の如く、鉛の弾で一括払いだ!」

AKを水平に薙いで距離をとって、前方目掛けて構える。
んで。

「遠慮すんなよ、知らない仲じゃねえんだ。
皆で仲良く頂きな!」

ありったけの弾をぶちこんだ。

・voice

「HEY、連中はみんな片付けた。
もう大丈夫・痛っ！」

肩に触れた手が思いつき叩かれた。
その痛みから伝わる明確な拒絶。

目には私の姿はなく、ただただ恐怖に濡れている。

そこに一人の少女の姿がダブる。

突然、得体の知れない黒いモノに襲われ、怖くて恐くて。
目にうつる全てがアイツら【嘘】とおんなじモノに思えて。
自分を助けてくれた人間すらも敵にしか見えなくて、力の限り暴れ
て泣きじゃくった、

十年前のあたし。

そのあたしを、あのサンタクロースは。シンさんは。

「うああ！離、離せ！うああ！」

抱き締めてくれた。落ち着くまで、ずっと。

どんなに暴れても殴られても罵られても。
ずっと笑顔で

「大丈夫だ、もう怖くない。」って。

「大丈夫だガキンちよ。アイツらは全部やつつけた。」
「やめっ！うわあ！離せ！離せ！離せえ！」

ガキンちよの拳が肩に頭に背中にあたる。心に体に鈍い痛みが広がる。

シンさん、やっぱアンタスゲーよ。こんな痛くて辛いのを、我慢してたのか、あの夜、見ず知らずのあたしの為に。

「ガキンちよ、あたしだ。サンタの姐さんだ。」「離し、離せよ！やめろ！わああ！」

声が届かない。体温を感じるのに距離が遠い。

ヤベ、柄にもなく泣きそうだ。

いつそう強く抱きしめる。唇を噛み締めながら。

一体どっちがすがってんだか。

情けねえなあ、あたし。

「うわっ・・・ひぐっ・・・えっ・・・うああああ！」

いつの間にか、あたしを拒む手から力が抜けていた。

わめき声が泣き声に変わっている。

よっし、ここ一番のいい笑顔で、最後の仕上げだ。

「よく頑張った、もう大丈夫だ。」

シンさん、見てっか？

アンタの守った小娘は、立派にサンタをやってるぜ。

ガキンちよの頭を撫でてやる。

触れた瞬間ちよっとビクツとなったが、もう大丈夫だろう。
男の子だしな。

「うつ・・・うつ・・・お父さん・・・。」

おいおいそこは母ちゃんか姉ちゃんだろうよ。

・・・全く、締まらねえな。笑っちゃまったじゃねえか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1105r/>

X'mas fire

2011年10月8日19時12分発行